

新しい、読書のカタチを提案する 「ポケットアンソロジー」

田畑書店



クシヨンなど順次作品数を増やしていく。「この商品の特長は『自分で編集すること』が楽しみがあることです。ふつう『アンソロジー』を編むのは、作家や批評家、あるいは編集者の特権でした。そして魅力

田畑書店（千代田区九段南、大槻慎二代表取締役、03・6272・5718、<http://tabatashoten.co.jp/>）は、創業53年の出版会社だ。主に社会科学系の良書を多数刊行している。

的なアンソロジーを編むことは、非常にやりがいのある楽しい仕事です。その『楽しさ』を広く読者ご自身に味わっていただきたい、というのが私たちの願いです」と大槻代表は語る。

スマホやタブレットなどデバイスの液晶画面を通して様々な文学作品が読めるようになった現代だからこそ、隅々にまで工夫をこらした「ポケットアンソロジー」で造本という新たな読書体験をしてみたいかがだろうか。

電子書籍が隆盛の現在、「紙の本なんてもう時代遅れ…」という風潮を逆手にとった商品が「ポケットアンソロジー」だ。短編小説を一編ずつ、まるで手帳のリフィルを綴じるかのように個別に買い求め、「ブックジャケット」に綴じて読むことができるという、今までにないまったく新しい「読書のカタチ」を提案する。文庫サイズの版面に、こだわりの明朝体を使った美しいレイアウト、さらに薄くてコシの強い特殊な用紙を使用することで、あえて「紙」で読むことに徹底的にこだわった逸品だ。

まずは近現代の日本の短編小説を中心に作品を展開し、海外翻訳小説やエッセイ、ノンフィ

